

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット:

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2021 鶴見 太郎



人種・民族についての悪い理論

鶴見 太郎

教養学部・大学院総合文化研究科（国際関係／地域文化研究）

用語が想定するもの

- 「人種」 生物学的に不変の身体的特徴を同じくする人間集団
- 「民族」 外見的特徴というより文化的特徴を共有し、ある程度同族意識を持つ人間集団。文化は長期的には可変的。

※ただし、それぞれに対応する現実があるわけではない

※しかし、あると信じられることによって、現実が作られる面も

※研究者は人種・民族にこだわりはないが、こだわっている人が一般に多いなかでどうするのか、が問題。

用語が流通した背景

○新しい概念ができるとき

A. 新しい現実が生まれるとき

「グローバル化」「リモートワーク」

B. 新しい現実を作ろうとするとき

「社会主義」「デジタルトランスフォーメーション (DX)」

C. 何かに対抗するとき (現実の再定義・掘り起こし)

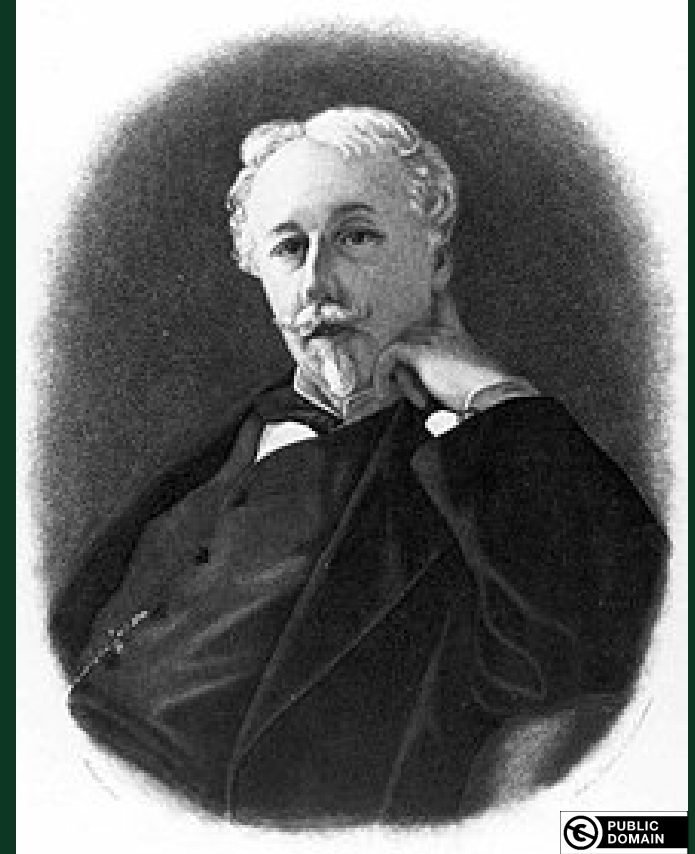
「伝統」「人種」「民族」

「人種」が流通した背景

○アルチュール・D・ゴビノー『人種不平等論』（1853-55年）

•ゴビノー：貴族の出身にして、フランス革命や1848年革命の国民平等理念に反発

→ 貴族性を持つ人種としてチュートン人（「アーリア人」）を想定。（フランスでもドイツでもアーリア人は一握り）



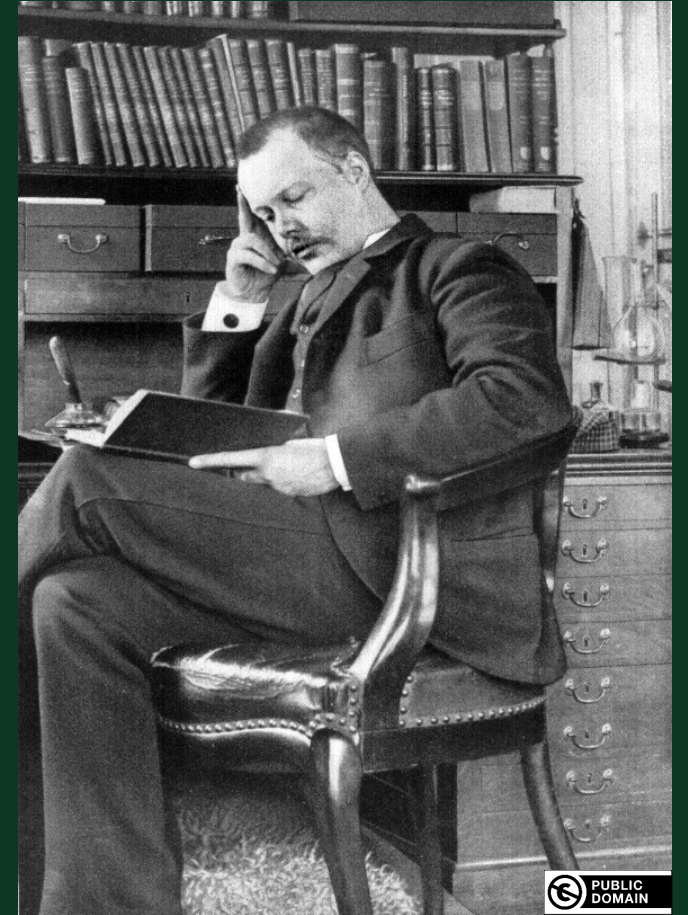
 PUBLIC DOMAIN

Wikipedia

「人種」が流通した背景

○ヒューストン・チェンバレン『19世紀の基礎』（1899年）

- チェンバレン：イギリス生まれ、ドイツに移住後、ゴビノー協会会員。
- 人種と精神的特質を結びつけて優劣を論じ、ゲルマン精神をローマ・カトリック精神とユダヤ精神から守ることを説く（ユダヤ人を底辺に位置づける）。人種混交の阻止を目指す。



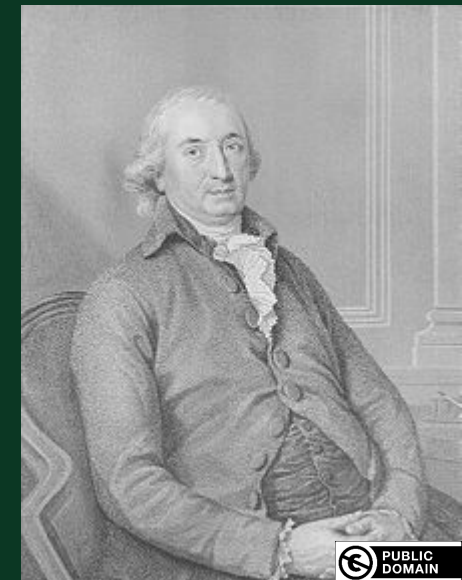
「民族」が流通した背景

○ヨハン・G・ヘルダー『言語起源論』
(1772年)

言語に発する自然な集合としてのVolk
(フォルク=民族、人民)：啓蒙主義の普
遍主義に対する対抗

○フランス革命(1789年～)の「ネーション」
(≡国民)

• 王制・貴族支配に対する対抗



「民族」が流通した背景

○フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』（1807-1808年）

- ナポレオン占領下
- 普遍主義を振りかざすフランスへの**対抗**

「われわれは...、世界君主制という幻想、あの憎むべき、理性のかけらもない幻想にもあえて我々の眼差しを向けましょう！...精神の自然〔本性〕は人類の本質を、もっぱらきわめて多様な諸段階において、個々人に即して、そして全体としての個別性、すなわち諸民族に即して示すことができたのです。民族おのおのが自己を信頼してその個性に応じて発展し自己を形成して初めて、そしてそれぞれの民族において各自が自分の特殊な個性とともにかの民族に共通の個性に応じて発展し自己を形成して初めて、神性の顕現がその本来の鏡のうちに、あるべき姿で映し出されてくるのです。」(ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテ(著)、鵜飼哲(訳)『国民とは何か』(1997年)インスクリプト)



 PUBLIC DOMAIN

Wikipedia

戦前日本での展開

- 第一次世界大戦の頃までは、「民族」はさほど確固とした意味で広範に用いられることはなかった。
- 「人種」「種族」「人民」などの語と併用



戦前日本での展開

○人種平等主義と民族に対する曖昧さ

- 近衛文麿「来るべき講和会議に於いて英米人をして深く其前非を悔いて傲慢無礼の態度を改めしめ、黄人に対して設くる入国制限の撤廃は勿論、黄人に対する差別的待遇を規定せる一切の法令の改正を正義人道の上より主張せざる可らず」（「英米本位の平和主義を排す」1918年）
- 国際連盟の日本全権代表は「人種平等条項」を要求

（篠原2010：57-58, 66-69）



Wikipedia

戦前日本での展開

- 日本の指導層は韓国併合後、朝鮮「民族主義」には批判的

→ 「民族」を固定的に捉え、尊重する立場はとりにくい

例) 高田保馬『民族論』(1942年) 岩波書店

「民族」は一定の範囲で共同生活を求めようとする意識と血縁や共同の文化、あるいは地縁などの客観的な条件のなかで定まっていく。民族が団結を強め、能動的態度をとるときに、近代民族が成立。



出典：小城市立歴史資料館

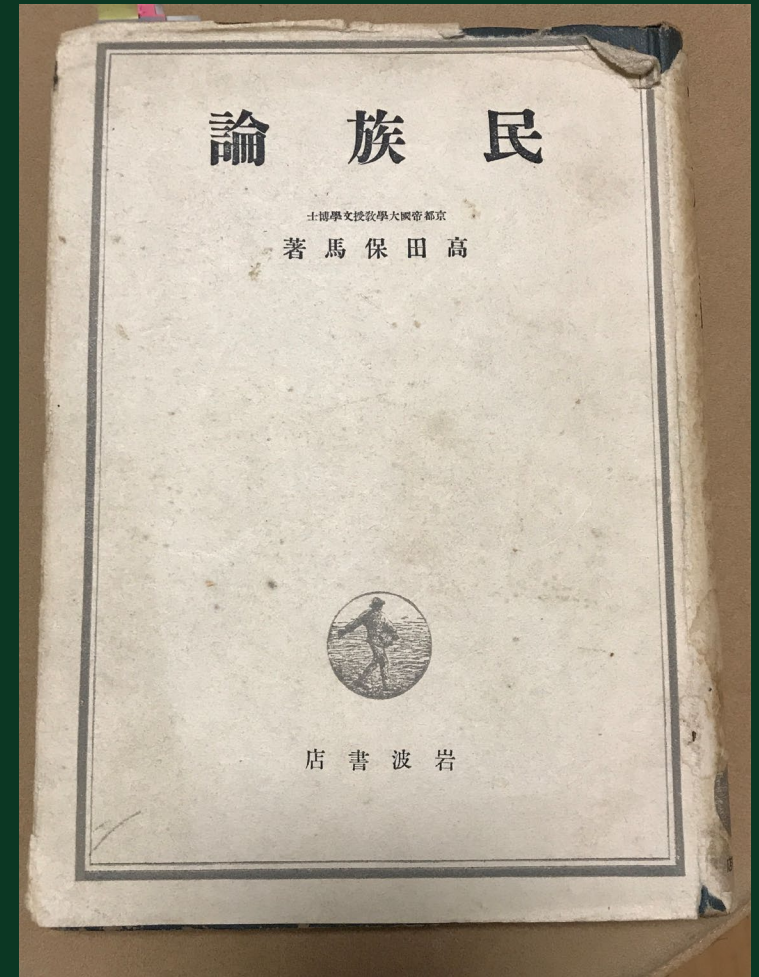
戦前日本での展開

→ 「民族」はあくまでも「程度的概念である」。

→ このことは「広民族」という概念も可能であることを示す（一定の必要に応じて伸縮を考える余地がある）

→ 「日満支を通ずる東亜諸民族の結合としての東亜民族」

○戦後は「単一民族」を強調（小熊1995）



高田保馬『民族論』（1942年）岩波書店

第二次大戦後世界の「人種」と「民族」

○「人種」の忌避と「民族」の称揚

- ナチズムの破滅の結果、「人種」が語られることは減った
- 意識や文化に関心が向けられ、「民族」の尊重に向かう
近代主義的同化主義の後退、民族自決論・民族自治・多文化主義の普及
- 「ユダヤ民族の国」イスラエル建国の国際社会からの後押し



The Jewish State Born, The Manchester Guardian, 15 May 1948

社会主義圏における民族理論

- スターリン「民族とは、言語・地域・経済生活・文化の共通性の中に現われる心理状態の共通性を基礎に生まれた、歴史的に構成された人々の強固な共同体である。」
- 各民族の事情に応じて社会主義を発展させていくという方針



「民族」の人種化

○ソ連崩壊後にイスラエルに移住したユダヤ人（10年間で累計120万人）

Aさん「私は黒人のユダヤ人を見たことがなく、エチオピア人がユダヤ人であるなんて考えたことさえありませんでした。」

Bさん「私はユダヤ性とは血だけのことであると思っています。」

(Fialkova and Yelenevskaya “Ex-Soviets in Israel”(2007) Wayne State University Press, 52, 54)

→ 結局、「動かしがたいもの」という意味での「人種」は、「民族」に乗り移って残り続けている。



写真 上 : Ohayan Avi [CC BY-NC-SA 2.0](#)

写真 下 : ISRAELI TSVIKA [CC BY-SA 3.0](#)

「民族」は動機か？

- ユダヤ移民の多くは、特段シオニストだったわけではない
- ソ連崩壊期の経済的・政治的混乱（反ユダヤ主義拡大含む）からの逃避
- 多くのユダヤ人が出ていくなかでパニック
- イスラエルを足掛かりに、アメリカに再移民しようとする者も

民族で説明できるのか

○表面的にはそう見える

- ソ連政府は「ユダヤ人」を民族（national'nost'）とし、それに従って統治
- イスラエル政府は（旧）ソ連の「ユダヤ人」を呼び寄せた
- 呼応した人々も、自らを「ユダヤ人」であることは否定しない
→ 結果的に、「ユダヤ人」という単位で多くの人々が動いた

民族で説明できるのか

- 政府が「ユダヤ人」を、統治の基礎単位である「民族」に分類したうえで統治した以上、人々がそれをある程度意識するのは当然
- 「西側」に属すイスラエルへの移民はソ連人には魅力的で、経済的動機のみでも移民はありえただろう。それを「ユダヤ人」に限定したので、「ユダヤ人」と自認する人々だけが向かうことになったのは当然
- ユダヤ的なものが動機でなくてもありえた移民の動きをことさらユダヤ人ならではの動きと捉えなければならない理由は見当たらない

民族で説明できるのか

○彼らの多くが自分をユダヤ人だと考えていることは事実

- 彼らが機会に乗じて「ユダヤ人」を名乗ったとだけ捉えるのも表層的にすぎる
- 本質的であるのは、彼ら一人一人にとっての「ユダヤ性」の意味と、自己のなかでの位置づけ、あるいは他の人々とのつながり

人種・民族についての悪い理論？

○理論が悪いというよりも、理論の前提が危うい

- 一つの概念にあまりに多くのことを載せようとした
- 原因と結果を取り違えている
- 「民族」も容易に人種主義的な発想に転化

「人種」の発想：人間である前に人種。（犬が猫になることはないのと同じように、白人が黒人になることはないという前提）

○実際には：民族である前に人間である。人間の一つの側面として民族がある

では、どうすべきか

- ①多面的な個人の「側面」の1つとして「民族的なもの」「エスニシティ」を捉える。
- ②その側面が他の側面や他者（の側面）とどのように関係しているのかを探る。
- ③ミクロな現実とマクロな現象を混同しない
例)
 - 民族単位で経済的誘引を用いて行われた施策の結果現れる民族を単位として見える動きは、主に経済の動きとみるべき
 - ある単位での差別構造は対象者に等しく効果をもたらすのではなく、各人が持つ別の側面との関係で決まる。例えばユダヤ人男性の経験とユダヤ人女性の経験は異なる。

主要参考文献

- 小熊英二, 1995, 『単一民族神話の起源—〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社.
- 川田順造, 1999, 「『民族』概念についてのメモ」『民族学研究』63(4).
- 塩川伸明, 2004, 『民族と言語—多民族国家ソ連の興亡Ⅰ』岩波書店.
- 塩川伸明, 2007, 『国家の構築と解体—多民族国家ソ連の興亡Ⅱ』岩波書店.
- 篠原初枝, 2010, 『国際連盟』中央公論新社.
- 関根政美, 1994, 『エスニシティの政治社会学—民族紛争の制度化のために』名古屋大学出版会.
- 鶴見太郎, 2020, 『イスラエルの起源—ロシア・ユダヤ人が作った国』講談社.
- ベネディクト, ルース(著), 筒井清忠, 寺岡伸悟, 筒井清輝(訳)1997, 『人種主義 その批判的考察』名古屋大学出版会.
- Fialkova, Larisa, and Maria N. Yelenevskaya, 2007, *Ex-Soviets in Israel: From Personal Narratives to a Group Portrait*, Detroit: Wayne State University Press.